長尾雨山と依水園

松村茂樹

はじめに

一九一四年十二月、上海に足かけ十二年、実質十一年滞在した漢学者・長尾雨山（1864—1942）が帰国し、京都に卜居した。雨山は、上海滞在中、商務印書館に勤務し、『最新国文教科書』『共和国教科書』等の教科書編纂に加わり、中国教育界の近代化に貢献したのみならず、劉炳照（1847—1917）と共に詩会を興し、隣人となった呉昌碩（1844—1927）と親交して、当時最新の学問と文人趣味を身に付けた。[1] また、岡倉天心（1862—1913）の委嘱でボストン美術館鑑査委員となり、呉昌碩「与古為徒」扁額を同美術館に贈るなど、高度な日中米文化交流をも現出した。[2]

雨山は帰国後、富岡鉄斎（1837—1924）の嗣子・富岡謙三（1873—1918）と共に、寿蘇会を主催した。これは、上海時代に劉炳照と共に興した詩会の後身で、呉昌碩と共に参加した周夢坡（1864—1933）主宰の詩会（消寒雅集、淞浜吟社）と同趣の雅会であった。この会には、漢学の素養や文人趣味に憧れる日本人士が多く参加し、「書画文墨趣味ネットワーク」が形成されることになる。また、当時関西書道界に大きな影響力を有していた平安書道会の副会長（会長は京大総長の荒木鳳岡（1866—1942）で、名誉職的色彩が強かった）を長く務め、書道界との繋がりも深かった。

このような繋がりの中で、雨山は、実業界でその名を挙げ、古美術収集に手を染めていた中村克斎（名は準策、1876—1953）、中村石廣（名は準一、1902—1952）父子と出会い、関係を深めることになる。克斎は、一九三九年、奈良に依水園を求め、翌年、寧楽美術館を設立して収蔵品の展示公開の場とし、石廣もこの事業を助けた。雨山は、この依水園の充実に大きく貢献しているのである。

本稿では、依水園に残されている資料および京都国立博物館に寄託されている石膏が雨山に宛てた書簡から、雨山と中村父子の関係を辿り、雨山が依水園に果たした役割を検証したい。このことにより、雨山の日本文墨界への貢献の一側面を明らかにできると思われる。

一、依水園と雨山との接点

依水園は、『文化庁』「国指定文化財等データベース／史跡名勝天然記念物：依水園」[3]に、以下のようにある。

東大寺南大門の西、吉城川の北側にある。前園および後園の、創始を異にする2つの築山泉水庭を水流でつなぎ全体として依水園と称する。前園は延宝年間、奈良の晒業者清須美氏の別業三秀園の遺構を整備したものである。後園は、明治三二年、奈良の富商関藤次郎のときに作られ、中心建築氷心亭から池を越えて東大寺南大門と若草・春日・御蓋の三山をとり入れた借景庭園として特に著名である。

この名園は、前述の通り、一九三九年、中村克斎により購入された。中村準佑「美術館を創った人々（九）……寧楽美術館／中村準策」[4]に、

昭和十五年皇紀二千六百年を記念して、故郷に錦をかざるべく、奈良市に『依水園』を求め、ここに収集過程にある、美術工芸品を順次展示公開することによって、芸術文化の向上に役だてようとしました。

とあり、購入の動機と目的がわかる。

同文によると、克斎は奈良の郡山藩の医師であった並河玄策の三男として生まれ、郡山中学から東京高等商業（現一橋大学）に進み、卒業後、大阪商船に勤め、大阪で海運業を営んでいた中村宇吉の婿養子となり、宇吉が興した中村汽船を経営した。第一次世界大戦後は、海運業から転じて太平洋海上火災保険（現損害保険ジャパン日本興亜）を興すなど、その先見性が高く評価されたという。[5]

克斎は、このように実業で成功する中、古美術収集を行うようになる。同文を続けよう。

大正から昭和初期にかかる、往時の古美術界は第二期の大売立の時期にあたり、美術品の収集にはまたとない好機でありました。準策はその時を逃さず、眼福を広げ、京都学派の内藤湖南、魚住惣五郎・梅原末治や、長尾雨山・園田湖城などの先生がたの知遇を得ると共に、収集対象を絵画から茶道具へ、さらに中国・韓国の茶陶磁および、書道関連の文物から、古代中国の金石へと、学者好みで、文人風のコレクションの完成をめざしたようで

す。

ここに雨山の名が見える。さらに、中村準佑「後記」[6]は、以下のようにいう。

推測すると、（中村準策）翁の長男、中村準一（一九〇二～一九五二）が趣味で始めた、中国古銅印の収集研究と相まって、余技とした篆刻の師、園田湖城氏を介して、長尾雨山氏との交流ができたものと思えます。この縁で、長尾氏と親しかった呉昌碩を通じて、当時の中国の文人墨客が所持していた法帖や碑帖の名品の数かず（宋拓晋唐小楷、宋拓集王聖教序、宋拓智永真草千字文、宋拓化度寺碑、明拓漢礼器碑、明拓天発神讖碑、明拓龍蔵寺碑など）が、蔵品に加えられたようです。

かくして、克斎は雨山と親交を結ぶことになる。

ただ、当時神戸にあった中村家が戦災に遭ったこともあり、克斎の書簡や書付は一切残されておらず、克斎の言動を確認できないことが惜しまれる。

二、雨山が克斎に与えた作品

①「順所適」扁額（写真は依水園提供、以下同）

克斎は、一九二四年五月（旧暦）、雨山に、今も依水園三秀亭に掲げられている「順所適」扁額を嘱している。翻字し、訳出しておこう（句読は松村、以下同）。

順所適

甲子榴華月、書於草聖堂之北牕。雨山居士。

〔適（かな）う所に順う

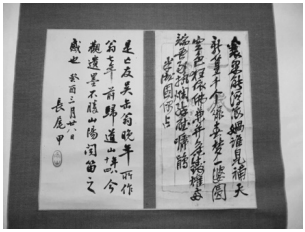
甲子（一九二四）榴華月（五月）、草聖堂の北窓で書いた。雨山居士。〕

「順所適」は、唐の杜甫「営屋詩」の「洗然順所適、此足代加餐〔草堂はさっぱりとして自分の気持ちに適っており、加餐に代えるに十分である〕」から採っている。また、款書で「榴華月（五月）」に「北牕」で書いたとあるのは、東晋の陶淵明「与子儼等疏」の「五六月中、北窓下臥、遇涼風暫至、自謂是羲皇上人〔五、六月中、北の窓の下に寝ころび、涼しい風がにわかに吹いてくると、自分が太古の羲皇以前の人になったように思える〕」という一節に基づいているのであろう。杜甫の成都草堂のような依水園で、自適して生きる姿が表されている。雨山が克斎の思いを汲んで選句したのであろう。ちなみに「草聖堂」は雨山の室号の一つで、草聖と称された唐の張旭「自言帖」を蔵して

いたことによる。また、この作には、呉昌碩が雨山に刻して与えた「長尾甲印」白文印および「石隠」白文印（甲は雨山の名、石隠は別号）が捺されている。雨山は、会心の作でなければ呉昌碩の刻印を用いなかったという[7]から、これも会心の作ということになる。

② 呉昌碩詩翰

一九三三年の三月二十八日（旧暦）、雨山は呉昌碩から贈られた詩翰に跋文を附して克斎に与えている。まずは呉昌碩の詩翰を見ておこう。



襄果能浮海、媧誰見補天。
新篁千个緑、春夢一婆円。
空色狂依仏、兼并旧鋳権。
両端吾敢執、爛醉聴啼鵑。

半淞園偶占

〔果たして楚の襄王は浮海し得たのか、誰が女媧の補天を見たというのか。

新竹千本の緑、春夢婆の占。

空即是色と狂おしく仏に帰依しながら、同時に久しくかりそめのことをしている。

両極端を私はあえて執っており、泥酔してホトトギスが鳴くのを聴いている。

半淞園にて偶たま占（い）う〕

詩題に見える「半淞園」は、上海南部にあった庭園で、呉昌碩はここに招かれて宴飲し、その際、即席で作られた詩である。『缶廬詩』『缶廬集』など呉昌碩の詩集には見えない。第一句は、楚の宋玉が楚の襄王の伴をして高唐に遊んだ際に作った「高唐賦」の「若浮海而望碣石〔海に浮かんで碣石山を望むようである〕」に、第二句は、古代神話上の女神・女媧の故事である『淮南子』「覧冥訓」の「女媧鍊五色石以補蒼天〔女媧は五色の石を練って蒼天を補修した〕」によるが、呉昌碩は、これらに懐疑の目を向けている。第三句は、南宋の謝枋得「竹」の「新篁娟娟如緑玉〔新竹は美しく緑の玉のよう〕」に、第四句は、宋の蘇軾が昌化に流されていた時、老婆が「内翰昔日富貴一場春夢〔あなたの昔日の富貴は一場の春夢だった〕」と言い、蘇軾がその通りだと答えたため、里人はその老婆を春夢婆と呼んだという宋の趙令畤『侯鯖録』に見える故事による。「円」は「円夢」つまり「占夢」で、夢占いをいい、美しい春の景色も、春夢婆の占いのように儚いという。そして、第五句以降で、仏に帰依しながら、売字売画をして俗世間

に生きる自分がいやで、今も泥酔しているというのである。

次に、雨山の跋文を見ておこう（〈　〉は割注）。

是亡友呉缶翁晩年所作。翁七年前帰道山〈年八十四〉、今観遺墨、不勝山陽聞笛之感也。

癸酉三月廿八日、長尾甲。

〔これは亡き友である呉缶翁（呉昌碩の別号）晩年の作である。翁は七年前に逝去し〈享年八十四〉、今遺墨を観ると、懐旧の念に堪えない。

癸酉（一九三三）三月二十八日（旧暦）、長尾甲（雨山の名）。〕

「山陽聞笛」は、晋の向秀が山陽の旧居を過り、笛声を聞いて懐旧心を起こし、「思旧賦」を作ったという『晋書』「向秀伝」に見える故事による。雨山は、向秀が亡友の嵇康、呂安を追念したように、呉昌碩を思い起こしつつ、この跋文を書いているのである。

この二紙は表装され、雨山が「呉缶翁半淞園詩翰 長尾甲署」と箱書きをしている。克斎に譲渡するためであろう。克斎はこれを大切に蔵した。

この他、雨山は、克斎蔵の呉昌碩八十四歳時作「牡丹図」に「呉缶翁牡丹図」、「雨山長尾甲署検」と箱書きをしている。

③「松柏心」扁額

一九三三年の五月（旧暦）、克斎は、雨山に、今も依水園氷心亭広間に掲げられている「松柏心」扁額を嘱している。翻字し、訳出しておく。

松柏心

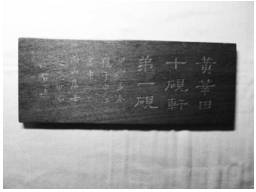
戴記曰、其在人也、如竹箭之有筠也、如松柏之有心也。癸酉仲夏、長尾甲書。

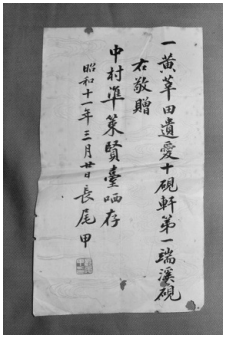
〔松柏の心

『大戴礼記』は言う、礼が人に具わるのは、竹箭に青皮が有るようなもので、松柏に心が有るようなものである。癸酉（一九三三）仲夏（旧暦五月）、長尾甲書。〕

松や柏（このてがしわ）の常緑樹は、常に色を変えないことから、節操の堅いことに喩えられる。款書の一節は『礼記』「礼器」に見え、「竹箭」の表面の堅貞に対し、「松柏」は内面の貞節を象徴している。この作には、呉昌碩刻「長尾甲印」白文印、「雨山居士」朱文印が捺されている。

④ 雨山旧蔵「黄莘田十硯軒第一硯」





一九三六年三月二十日、雨山は自蔵の「黄莘田十硯軒第一硯」を克斎に贈っている。この硯は、雨山が上海滞在中の一九一四年に入手したもので、その箱に刻されている題字と款書に以下のようにある。

黄莘田十硯軒弟一硯

甲寅孟冬、獲于申江客中。雨山居士長尾甲心賞。

〔黄莘田十硯軒第一硯

甲寅（一九一四）孟冬、申江（上海）客寓中に得た。

雨山居士長尾甲が心賞している。〕

黄莘田（1683—1768）は、名を任、字を莘田といい、于莘と号し、その居を十硯斎また十硯軒と称した。清の康熙の挙人で、官は広東四海知県。書をよくし、硯癖があった。この硯は、「十硯軒」の室号に由来する十硯の第一硯という。雨山は、克斎に宛て、以下のような書き付けをしている。

一、黄莘田遺愛十硯軒第一端溪硯、右敬贈。中村準策賢台哂存。昭和十一年三月廿日、長尾甲。

〔一、黄莘田遺愛の十硯軒第一端溪硯、右を敬贈する。中村準策賢台笑存されたし。昭和十一年三月廿日、長尾甲。〕

これは贈呈という形を取ってはいるが、克斎と雨山の関係に鑑みると、克斎に求められて雨山が譲渡したと見るべきであろう。このような書き付けの存在は、雨山の蔵品なればこそ価値があったことを物語る。

その後、一九三九年十一月十七日から十九日まで、大礼記念京都美術館で開催された第二十回平安書道会展覧会に、克斎は、自蔵の「元、王蒙山水幅」「元、鮮于枢書東坡与石墉問答巻」「宋、拓聖教序」「同、翻刻本」「宋、拓小楷冊」を「参考品」として出品していることが、『第二十回展覧会出品目録』（一九三九、一一、一七 平安書道会／東京大学東洋文化研究所蔵）によってわかる。平安書道会は、前述のように雨山が実質的会長である副会長を務めた書道団体で、克斎のみならず、嗣子の石頎も雨山との関係から、

より深く参画している。

三、雨山と石廣との交誼

克斎の嗣子・石廣は、一九二八年、早稲田大学経済学部を卒業し、父の経営になる太平洋海上火災保険の専務取締役として父を補佐した。[8] 石廣が雨山に宛てた書簡が十六通、長尾家に残されており、京都国立博物館に寄託されている。その最も早期のものが一九三一年十月三十一日付で、挨拶の後、「過日拙詩稿御届仕候処、御繁忙中ニモ不拘御大斧賜リ唯今拝受、難有ク御礼申上候」（句読点は松村、以下同）とあり、二人の交誼は、石廣が雨山に詩の指導を請うたことに始まっているのがわかる。ただし、二人はまだ会っていない。一九三三年六月四日付に、「昨日ハ初メテ御目ニ掛リ乍ラ」とあり、この年の六月三日に初めて会っている。また、同年八月十五日、九月二日、十二月二十七日、一九三四年一月二十四日、一九三六年二月十四日付では、詩の指導を請うている。そして、一九三五年六月二十二日付に、「本朝、佐々木氏ヨリ御染筆被下候品々拝受仕候、御芳情難有御礼申上候」とあり、雨山に揮毫を依頼しているのがわかる。ちなみに、「佐々木氏」とは、石廣が専務取締役を務める太平洋海上火災保険の取締役支配人である佐々木秀一（1883—1965）のことと思われる。佐々木は、石廣の収蔵活動にも関わり、後出の「財団法人寧楽美術館設立趣意書」も書いている。また、その嗣子・佐々木剛三氏は、寧楽美術館理事長を務めた。

同年十月二十七日付には、「昨日久方振ニ御目ニ掛レ无、其ヲ楽ニ平安書道展拝見ニ参上仕候処、生憎東京ヨリノ御来客ト御外出ノ直後トノ事ニテ拝顔スル事ヲ不得誠ニ残念ニ存候」とあり、平安書道会のことが初めて見え、一九三五年十一月九日付（速達）に、「陳者、小田氏ノ平安書道会入会申込書並ニ会費同封御届申上候間宜敷御願申上候」とあり、追伸に、「尚、小田氏ハ大阪春海商店ノ処士ニ御座候」とある。ちなみに「小田氏」とは大阪の骨董商・春海商店の大番頭であった小田栄作（1889—1980）のことで、石廣は財界人脈を雨山に紹介していたのがわかる。

前述のように、雨山は、上海時代に呉昌碩と共に参加した周夢坡主宰の詩会と同趣の寿蘇会を、大正年間の乙卯、丙辰、丁巳、己未、庚申の五回に渡って開催した。寿蘇会は、宋の蘇東坡の生日である旧暦十二月十九日に行われたが、蘇東坡の生年である丙子（一〇三六）から九百年目の丙子十二月十九日（新暦一九三七年一月三十一日）、雨山は、人生最後となる寿蘇会を京都岡崎つる家を会場に開催

したのである。その際、雨山は、事務所を友人の篆刻家・園田湖城（1886―1968）方に置いており、湖城の門下にあった石廣は、父と共に発起人に名を連ねている。この丙子寿蘇会開催が二人の関係を深化させたと思われ、石廣は収蔵面においても雨山の指導を仰ぐことになる。

①「呉平斎山水扇」跋

一九三七年の旧暦八月、雨山は石廣蔵「呉平斎山水扇」[9]に箱書きし、蓋裏に跋文を書いている。

愉庭富于書画収斎、目見手熟、自得骨法、不堕画浅套習、此可喜也。戊寅秋仲、雨山七十五叟。

〔愉庭（呉平斎の別号）は書画収蔵に富み、目で見て習熟し、自ら筆力を悟り、画は浅薄な俗習に堕しておらず、これは喜ばしいことである。戊寅（一九三七）秋仲（旧暦八月）、雨山七十五歳の叟。〕

呉平斎（1811―1883）は、名を雲、字を少甫、平斎また愉庭と号し、その居を二百蘭亭斎、両罍軒と称した。清の道光の諸生で、官は蘇州知府。収蔵に富み、鑑別を善くし、書画に長じた。一八八〇年、呉昌碩を幕僚とし、その収蔵を見せて学ばせている。雨山は、呉平斎が収蔵家なればこそ、収蔵品に学び、筆力を高めたことを石廣に教えているのである。

こうして、詩の指導に始まった二人の交誼は、一九三八年三月十九日付に、「過日上洛之節ハ誠ニ失礼仕候。陳者先般御話有之候古銅印、去十六日湖城先生より落掌仕候」と、園田湖城を介して、古銅印の購入仲介に発展し、書風からほぼ同時期と思われる年不明八月十二日付に、「陳者、過般来印之事ニ付種々御配慮相賜り御好意難有厚く御礼申上候」とあるように、雨山は石廣の印に関する収蔵顧問となっていたのがわかる。

ちなみに、石廣の雨山宛書簡は、一九三五年十月二十七日付までは、後出の鄭孝胥を意識した書風で書かれているが、同年十一月九日付からは、雨山の草書を思わせる書風となっており、石廣の雨山への傾倒が窺える。なお、同書簡は、年月日が記されているものとしては、一九三八年六月十三日付が最後となっている。

②鄭孝胥書「韜精養潜」扁額

依水園氷心亭大炉の間には、鄭孝胥書「韜精養潜」扁額

が掲げられている。款書に「石廎先生属。孝胥」とあり、石廎のために書かれたものである。「韜精」は、才能を覆い隠すことで、南朝宋の顔延之「五君詠・劉参軍」に「韜精日沈飲、誰知非荒宴〔才能を隠して日々痛飲しているのであって、酒宴に浸り溺れてはいないのを誰が知ろうか〕」とある。「養潛」は、隠居して人目につかないようにすることで、つまり、この「韜精養潛」は、現代の鄧小平が用いた「韜光養晦」（出典は清の兪万春『蕩寇志』第七六回）と同意の語で、鄭孝胥の人生指針であったと思われる。

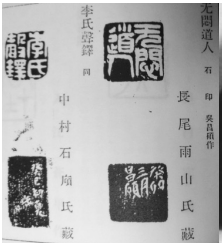
鄭孝胥（1860―1938）は、字を太夷といい、蘇戡また海蔵と号した。清の光緒の解元（郷試の首席及第者）で、後に満州国総理となった。詩文書画にすぐれ、一八九一年六月、東京の清国公使館に書記官として赴任し、同年十二月十二日、当時文部省専門学務局に勤め、東京美術学校講師を兼務していた雨山と知り合い、以後、生涯にわたって深交した。

同風印社（園田湖城主宰）輯『印印』第三十六集（一九三八、五 同風印社）「余滴[10]」に、

四月二十八日洛東建仁寺僧堂に於て満州国建国元勲鄭蘇勘（ママ）（正しくは戡）先生の追悼会を長尾雨山先生、園田湖城先生等発起にて営まる。

とあり、この追悼会参列者に石廎の名も見える。

③ 呉昌碩刻「李氏声鐸」白文印



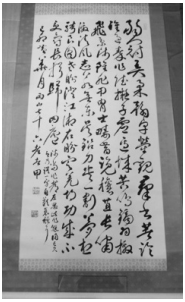
依水園には、呉昌碩刻「李氏声鐸」白文印が蔵されている。側款に「癸巳（一八九三）初夏（旧暦四月）缶（呉昌碩の別号）」とあり、呉昌碩五十歳時の作である。前出『印印』の第三十七集（一九三八、九 同風印社／依水園蔵）に、この作の印影と側款拓が掲載されており、「中村石廎氏蔵」とあるため、石廎の蔵とわかる。そして、この前には、「長尾雨山氏蔵」の呉昌碩刻「无悶道人」白文印の印影と側款拓が掲載されている。「无悶」は雨山の号の一つなので、呉昌碩が雨山に刻した印のように思われるが、この側款に「癸卯（一九〇三）三月昌碩」とあり、呉昌碩六十歳時の作で、この頃には、雨山はまだ呉昌碩と知り合っていない（雨山が上海に出発したのは一九〇三年十二月一日）。よっ

て、この印は、後年、雨山が購入したものであろう。そして、石廣蔵の呉昌碩刻「李氏声鐸」白文印も、印の収蔵顧問となっていた雨山が購入の仲介をしたと思われる。

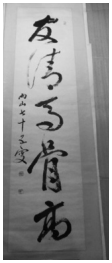
④ 平安書道会展出品作購入

前述のように、雨山は、平安書道会の実質的会長である副会長を務めていたが、『昭和十二年度 平安書道会会報』（一九三八、二、二五 平安書道会／関西大学図書館蔵）「役員」に、「事業部理事」として「石廣 中村準一」の名が見える。また、同『会報』には、一九三七年に開催された「第十八回展」に雨山が出品した「詠史」が写真版で掲載されているが、これが依水園に蔵されており、雨山が「詠史七絶草書」「雨山長尾甲自署検」と箱書きをしている。石廣が購入したのであろう。ちなみに、同『会報』には、克斎が社長を務める太平洋海上火災保険株式会社の広告があり、「取締役社長 中村準策」の次に「専務取締役 中村準一」が名を連ねている。

また、『第二十回展覧会出品目録』（一九三九、一一、一七 平安書道会／東京大学東洋文化研究所蔵）に、雨山の



草書「古詩」（前出呉昌碩刻「長尾甲印」白文印、「石隠」朱文印が捺されている）が見えるが、これと思われる作品、及び第二十一回展覧会出品作と思われる草書「官清馬骨高」（同上印が捺されている）も依水園にあり、その他、「猗々、雨山老人」「石隠醉筆」と落款が入った「竹石図」（年代不明・前出とは別の呉昌碩刻「長尾甲印」白文印、「長生未央」朱文印が捺されている）も残されている。この三点には、「長尾雨山先生 中村石廣氏蔵」という後年の展覧会出品時に使われたと思われる名票が付されており、石廣の蔵であることがわかる。ちなみに、同『出品目録』には、「平安書道会役員名簿（昭和十四年度）」があり、「理事」「評議員」に「石廣 中村準一」の名が見える。そして、同『出品目録』に付されている別紙「第二十回平安書道会展覧会規程」には、新しく改選された（昭和十五（一九四〇）年度ということになろう）の「平安書道会役員」一覧があり、「顧問」に「中村準策」が



加わり、「理事」「評議員」に「石廣　中村準一」が名を連ねている。

四、ネットワークへのコミット

以上に見てきたように、克斎・石廣父子は、雨山という無上のアドバイザーを得て、嘱書をし、蔵品を譲ってもらい、作品購入の仲介と共に、箱書きをしてもらい、跋文を書いてもらって、雨山が呉昌碩を通して身につけていた中国の学問と文人趣味を学んだ。そして、雨山は、前述のように、一九三七年一月三十一日開催の丙子寿蘇会の発起人をこの父子に依嘱し、「書画文墨趣味ネットワーク」に加えるのである。この時の発起人を表に列挙しておこう。

伊藤寿一（1909—1945）書家、平安書道会常務理事
入沢昕江（1878—1945）名は賢治、書家、平安書道会評議員
出雲路春塢（1878—1939）名は通次郎・敬通、京都下御霊神社社司、京都帝国大学講師、平安書道会顧問
稲畑龍峰（1862—1949）名は勝太郎、日本染料製造株式会社社長、平安書道会評議員
石田凌風（1882—1952）名は義一、書家、平安書道会理事長
小川睦之輔（1885—1951）京都帝国大学医科大学教授
大谷禿庵（1887—1948）名は瑩誠、真宗大谷派連枝
大塚雨峯（生卒年未詳）名は良治、書家、平安書道会事業部理事
高瀬惺軒（1868—1950）名は武次郎、漢学者、京都帝国大学文科大学教授、平安書道会評議員
園田湖城（1886—1968）名は穆、篆刻家、平安書道会常務理事
中井焦陰（生卒年未詳）名は誠三郎、書家、平安書道会事業部理事
長尾雨山（1864—1942）名は甲、漢学者 平安書道会副会長・学芸部長
中川白雲（1866—1944）名は小十郎、立命館総長、平安書道会事業部長
中村克斎（1876—1953）名は準策、太平洋海上火災保険会社社長、収蔵家
中村石廣（1902—1952）名は準一、太平洋海上火災保険会社専務取締役、篆刻家、収蔵家、平安書道会事業部理事
中野越南（1883—1980）名は謙之介、書家、平安書道会学芸部理事
楽雙橘（1887—1944）名は吉左衛門・喜英、陶芸家、平安書道会事業部理事
野村得庵（1878—1945）名は徳七・信之助、野村財閥創設者、平安書道会評議員
能勢照郷（生卒年未詳）書家、平安書道会事業部理事
熊谷直之（1876—1973）鳩居堂九代目当主、平安書道会事業部

理事
山本紫竹（1871—1941）名は行範、漢学者、国学者、平安書道会顧問
八木清八（1879—1956）呉服商水清主人・五代目水口屋清兵衛
松井貞太郎（1884—1952）古梅園十二世当主、平安書道会評議員
松永非石（?—1966）名は周三郎、京都帝国大学医科大学教授、平安書道会評議員
牧野梅窓（生卒年未詳）
藤井静堂（1873—1943）名は善助、藤井紡績創業者、平安書道会顧問
小村大雲（1883—1938）名は権三郎、画家
阿部笙洲（1868—1937）名は房次郎、元東洋紡績社長
柚木玉邨（1865—1943）名は梶雄、画家
水田竹圃（1883—1958）名は忠治、画家、平安書道会学芸部理事
三浦梅癡（1865—?）名は豊二、漢詩人
三野二山（1883—1996）名は有造、漢学者、平安書道会評議員
箕浦蓼江（1887—1969）名は忠愛、俳人、動物学者、成安女学院院長、平安書道会常務理事
庄司杜峰（1873—1944）名は乙吉、東洋紡績社長　平安書道会顧問
柴田膽山（1866—1946）名は虎次郎・源七、長浜室町縮緬問屋・織屋十代目当主
守屋千洲（18756—1953）名は孝蔵、弁護士、収蔵家
瀬川犇山（生卒年未詳）名は徹、書家、平安書道会常務理事
杉野儷山（1878—?）名は松太郎・綱、画家　平安書道会学芸部理事

ここには、漢学者、書家、画家、実業家、医学者、神職、弁護士、陶芸家、俳人など各界人士が顔を揃えている。また、この中には、当時、雨山が副会長を務めていた平安書道会に属している人が多いが（肩書きは前出『昭和十二年度 平安書道会会報』「役員」による）、これは、平安書道会が「書画文墨趣味ネットワーク」のコアになっていたことを物語っている。

この丙子寿蘇会をきっかけに、石頃と雨山の関係が深化したことは前述の通りであるが、克斎との関係もより深まり、一九三九年、克斎の依水園購入に伴って計画された寧楽美術館設立にあたり、雨山が評議員に名を連ねることになる（依水園に残されている「財団法人寧楽美術館設立趣意書」による）。つまり、雨山は、依水園・寧楽美術館の発足時から大きな関わりを持っており、これが現在の発展の堅実なる基盤となっているのである。

そして、翌一九四〇年三月、財団設立の認可が下り、同年四月に財団設立記念特別陳列が行われた。前述のように、克斎は、この一九四〇年から平安書道会の顧問に就任しており、以前より理事・評議員であった石頃と共に、雨山のネットワークにより深くコミットすることになる。

おわりに

本稿では、依水園に残されている資料および石頃が雨山に宛てた書簡を分析し、長尾雨山と中村克斎・石頃父子の交誼を辿ることにより、雨山が、中村父子の収蔵顧問となり、さらには「書画文墨趣味ネットワーク」に加えていたことを明らかにした。

「はじめに」で述べたように、雨山が日中で果たした文化的・社会的役割は多く、とりわけ、帰国後、寿蘇会などの開催により「書画文墨趣味ネットワーク」を形成し、そこに各界の人士を取り込み、大きな影響力を有したことは特筆に値する。今回は、雨山と中村父子の交誼を取り上げることにより、その一側面に光をあてることができた。今後も、このような研究を重ね、「書画文墨趣味ネットワーク」の全体像を明らかにできればと思う。

注

(1) 拙稿「長尾雨山が上海で参加した詩会について」『日本中国学会報』第六六集 二〇一四、一〇、一一 日本中国学会 で論じた。

(2) 拙稿「近代のボストン美術館に見る日中米文化交流について―岡倉天心、長尾雨山そして呉昌碩の貢献―」『人間生活文化研究』第二七号（二〇一七、九、一一 大妻女子大学人間生活文化研究所）で論じた。

(3)『文化庁』「国指定文化財等データベース／史跡名勝天然記念物：依水園」https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/explanation.asp 2019/02/17（プリントアウトの日付）

(4) 中村準佑「美術館を創った人々（九）……寧楽美術館／中村準策」『茶道の研究』第三三巻第九号 一九八八、九、二五茶道之研究社 なお、著者の中村準佑は、中村準一（石頃）の嗣子で、当時、寧楽美術館館長であった。

(5) 依水園・寧楽美術館学芸員 濱田美和子氏提供になる村上雄次郎著『日本紳士録』第二九版（一九二五、一二 交詢社）、同第三二版（一九二八 交詢社）、本郷直彦編『兵庫県人名鑑』昭和一一年版（一九三六、七 神戸新聞通信社）、人事興信所編『全日本紳士録』昭和二五年版（一九五〇 人事興信所）、廣瀬弘監修『昭和人名辞典』二第三巻西日本編（一九八九 日本図書センター）、『日本産業人名資料事典』第二巻（二〇〇一、九 日本図書センター／『工業人名大辞典』一九三九 満蒙資料協会出版部 の複製）所収「中村準策」の項には、太

平洋海上火災保険（株）社長の他に、伊豆温泉土地（株）社長、京阪土地（株）取締役、神戸信託（株）取締役、大和鉄道（株）監査役、旭日生命（株）相談役、釜山鎮埋築（株）社長、兵庫大同信託（株）取締役、豊国證券（株）会長、オーエス映画劇場（株）取締役、大阪製鎖造機（株）取締役、親和高女理事といった肩書きが記されている。

（6）中村準佑「後記」『寧楽美術館蔵 宋拓晋唐小楷 解説』（一九九二、一一、二四 財団法人寧楽美術館）

（7）松丸東魚『呉昌碩印譜第二集』（一九五六、二 白紅社）「解説」に、「（長尾雨山）先生は呉翁の刻印を非常に大切にされ、会心の作でなければこれを用ゐられなかったさうで、又、使用後は真綿の如きもので叮嚀にこれを拭つておられたともきいて居る」とある。

（8）（5）で挙げた『日本産業人名資料事典』第二巻「中村準一」の項による。

（9）同風印社（園田湖城主宰）輯『印印』第四十集（一九三九、四 同風印社）に、「呉平斎山水 中村石廎氏蔵」が掲載されており、石廎蔵であることがわかる。なお、この項に関しては、宮澤昇『園田湖城論 印人追慕』（二〇一六、九、二三 静観堂）所収「『印印』（同風印社）目次」を参照した。

（10）（9）で挙げた宮澤昇『園田湖城論 印人追慕』所収「『印印』（同風印社）目次」を参照した。

（付記）本稿は、依水園・寧楽美術館と長尾家および京都国立博物館のご助力により執筆することができました。依水園訪問時にご案内をいただいた副館長の中村浩史氏、学芸部長の山崎智子氏、写真・資料をご提供いただいた学芸員の濱田美和子氏、そして、資料閲覧をお許しくださった長尾家および京都国立博物館列品管理室主任研究員の呉孟晋氏に深く感謝申し上げます。また、小田栄作について、香雪美術館学芸員の落合治子氏に御教示をいただきました。記してお礼申し上げます。

本研究はJSPS科研費JP17K02648および大妻女子大学戦略的個人研究費S3033の助成を受けたものです。

（大妻女子大学）